

第四講座 文学的文章の読解

P 78 ① 26年度

△解答▽

- 1 世界
- 2 男子が知咲にぶつかって、絵が台なしになったから。
- 3 ア
- 4 ウ
- 5 人との関わりで得られる喜びがあることがわかり、人から逃げてきた自分を愛えていこうと決意した。

△解説▽

- 1 デッサンを描いている場面の記述を見て、次の二箇所を押さえる。
○あたしは世界に石膏像と二人きりみたいな気持ちになる。
○世界ができていくのが楽しい。特に、後者は間の文の「ができていくことがうれしい」と「部が同じである。」
- 2 原因となったこと、その結果起きたことを、具体的にはつきりと書く。
原因の部分は誰が誰にぶつかったのかを明示する。結果の部分は、「デッサンに思いきり黒い線が生まれてしまった」を元にするが、このままでは「声をあげて怒りたかった」理由がはっきり示されていないので、「絵が台なしになった」とする。
- 3 前後の「やっぱり、ものすごくまっすぐな顔をしている」、「同じようにとは思わなかったけど、まっすぐな顔をしながら」、「を押さえ、傍線部と合わせると男の子のまっすぐな姿勢に、自分もまっすぐな態度で応じようとしていること、しかし「目をそらしたくなる」(気後れしている)ことが読み取れる。
- 4 知咲の心の変化が問われているので、変化の前後を示す心情を押さえる。「いつもあたしの周囲を漂っている面倒くささや嫌悪感」から周囲に対するかたくなな態度が読み取れる。
- 5 男の子とのやりとりの後「絵をほめてもらった嬉しさもあることが自分で意外だった」とあり、「意外だった」の前が、知咲が「わかった」ことである。

これに「人から逃げないようになりたい」という部分を決意として加えてまとめる。

P 80 ② 27年度

△解答▽

- 1 ア
- 2 (自分は) いままでといっしょだ
- 3 エ
- 4 自分らしくがんばればそれでいいのだと気づき、ほっとした気持ちになった。
- 5 ひろひろ

△解説▽

- 1 直後の「の一心」に着目。「の一心」は何かあることをしきりにしたがる様を表す表現、そこまでわからなくても、前後の表現から体育系の部活にこだわる千鶴の心情であることがわかる。その上で、千鶴の会話部分から「変りたい」「いままでとはちがう自分になりたくて」を押さえる。
- 2 1から千鶴は「変りたい」と思っていることがわかるが、「うんざり」するのは、その反対の状況に関して、「自分はこれまでとおなじレベルの上を走りつづけることになる」「いまままでのわたしといっしょ」という表現を押さえてまとめる。
- 3 しほりんの会話を確認するとよい。傍線③の「わかるよ、千鶴の気持ち」は、千鶴の思いを受け止め、と対応している。
その2行あとにある会話、「あたしも、そんなふう思うことあるし」は、自分と重ねあわせながら、に対応している。さらに、「でも、それでもあたし、千鶴は千鶴らしいことをしたほうがいいと思う」は、自分たちのあるべき姿を率直に語ろう、に対応している。
- 4 「どんなことに気づき」は直前の「千鶴はその言葉を吸いこんだ」に着目する。その言葉とは、その前のしほりんの言葉である。そこで、千鶴が変わるために「千鶴は千鶴らしくがんばればいい」と言われていることを押さえ

るとよい。

「どんな気持ち」は「肩の力がぬけた」から、不安に対して構えた気持ちから、ほっと安心したことをとらえる。

5 「象徴的に」に注意。千鶴としほりんのことを直接述べたところではなく、象徴として読み取れる部分をさがす。「成長」「音楽」から「ハーモニーを育てていく」を見つけるとよい。

P 82 ③ 28年度

〈解答〉

- 1 9
- 2 オ
- 3 父に影響を受け、将来科学者になりたいと憧れたから。
- 4 中途半端な
- 5 ウ

〈解説〉

- 1 まず、文節に区切ってから単語に分けていく。「なつて」は動詞「なる」の連用形（促音便）に接続助詞の「て」がついた形。「いた」は動詞「いる」の連用形に過去の助動詞「た」がついた形。
- 2 5～7行目に注目する。特に「石けんにくんと興味が広がる」という表現から、石けん作りに対して興味をひかれていることが分かる。
- 3 23～35行目にあるマチの問いに対する奏人の答えに注目する。小さい頃、父親を科学者だと思っていて、その父親に影響を受けたこと、本人も科学者になりたいという憧れがあることが書かれている。
- 4 36～39行目に注目する。奏人との会話を通して、自分が中途半端な気持ちで科学部に入ってしまったことを反省しているのが分かる。
- 5 直前の「それが、とても楽しい」に注目する。「それ」は41～42行目の「今日からは、気になるはずだ」を指しており、以前とは違ったものの見方ができるといえる。マチが感じていることが分かる。

P 84 ④ 29年度

〈解答〉

- 1 にしがみついていた。
- 2 妹を憎らしく思う気持ち。
- 3 おねえちゃん
- 4 姉という自分の立場を生きていこうと思うようになった。
- 5 オ
- 6 イ

〈解説〉

- 1 ここで言うできごととは、幼い頃の蟬に関する思い出を指している。5行目の「その日も」から始まり、18行目「〜ていた。」までが思い出の内容である。
 - 2 22行目に「一言でいえば、憎らしくてたまらなかつたの」に注目する。妹を大事にしなければならぬことを理屈では分かっていた反面、妹を憎らしく思う気持ちがあることが分かる。
 - 3 28～30行目から、このとき姉のことを何度も呼んでいたことが分かる。また、64行目から「私」は姉のことを「おねえちゃん」と呼んでいることが分かる。
 - 4 40～41行目で「生きて行くってことはいろんな立場を生きて行くってことだろう」と姉が言っていることに注目する。また、25行目に「姉妹なんだって、理屈でなく分かつたの」とも言っている、この2つの部分から、（妹に対する）姉という立場を気持ちの部分で受け入れられたことが分かる。
 - 5 ここでの「鏡」は「私」と姉の心が触れ合うことを遮る障壁のようなものをたとえている。
- ア 「幼く」「反発」 イ 「気まぐれな愛情表現」 ウ 「恨み」「不信感」
エ 「口下手」が本文から読み取れない。
- 6 「奔流」とは、勢いのある激しい流れのこと。ここでは、姉に対する様々な思いが一気にあふれている様子を表している。

△解答▽

- 1 特産物と観光
- 2 今時の女の
- 3 ゆきの感情的な言動が原因で取材が台無しになってしまったこと。
- 4 イ
- 5 工

△解説▽

- 1 何をアピールすることに繋がっているのかを読みとる。
4行目に「販売促進だけじゃなく、観光にも繋がっていた」とあるので、ここを六字でまとめている部分を探す。また、24行目に「特産物と観光を上手に絡めてアピールした」とある。
- 2 33～34行目、38行目のセリフより、女性リポーターは、単なる流行り（ブーム）でゆきが農業を行っていると思っていることが読みとれる。ことと同じ内容で□に当てはまる部分を探す。すると、56行目の「一時の感情でやっている」が見つかる。
- 3 36～37行目、39～40行目に注目する。
むきになってリポーターに反論しているところから、感情的になっているゆきの様子が読みとれる。これにより、その場の空気が重くなり、撮影がストップしている。また、どうなってしまったかについては、50行目に「せっかくの取材、台無しにしちゃいましたね」とあるので、ここをまとめるとよい。
- 4 ここまでの流れを読み取る。自分のせいで取材を台無しにしてしまい、その上女将にまで謝られたことで、その場に居づらくなっていることが読みとれる。それぞれの語句の意見は次のとおり。
ア：気にしない。 イ：その場にじっとしてられない。
エ：逆らえない。 オ：納得できない。
- 5 説明として「適当でないもの」を選ぶ問題なので注意する。本文の61行目～65行目の内容をふまえて考えると、エの「取材のときの失敗を取り戻そう」という部分が不適。

- | | | | | | | | | | |
|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|
| 1 訪 | 2 携 | 3 漂 | 4 手綱 | 5 盛 | 6 黙 | 7 告 | 8 継 | 9 就 | 10 支 |
| 11 繕 | 12 慎 | 13 募 | 14 潰 | 15 滯 | 16 萎 | 17 半 | 18 眺 | 19 怠 | 20 滑 |
| 21 苦笑 | 22 濁 | 23 拭 | 24 映 | 25 弾 | 26 省 | 27 浸 | 28 膨 | 29 隔 | 30 干 |
| 31 朗 | 32 誇 | 33 綻 | 34 賄 | 35 貪 | 36 専 | 37 催 | 38 緩 | 39 弱音 | 40 湧 |

△解答▽

- 1 緊張感がほぐれた
- 2 ア
- 3 ウ
- 4 調和がとれていることを感じ取り、金賞を獲得できると確信した。
- 5 学校はなくなっても互いに励まし合った仲間との友情は変わらないということ。
- 6 イ

△解説▽

- 1 肩の力が抜ける（慣用句）とは、「緊張が解ける」の意味。
本文中から、誰かが緊張している場面やそれがほぐれる場面を探す。
- 2 ・大輝は仲間を励まそうという気持ちを持っている。（リード文の最後の部分）
・大輝は自分のこの発言について「こんな時（みんなが緊張している時）だからいいのさ」（27行目）と述べている。
・大輝のこの発言によってみんなの緊張感がほぐれている。（30行目）
以上から、アが正解。
- 3 直後の一文に「しっかり歌いこんだ成果で、どちらも声に力みがない。」とあるので、歌声に対してプラスに評価している選択肢を選ぶ。ア、イはあてはまらない。
- 4 工「悠々と勇ましい」が女子の声を表現するのに不適切。
オ「我先に」が合唱に不適切。
- 4 〈雄太郎が確信した結果〉

雄太郎たちが求めている結果は、リード文より「金賞を獲得」することである。

〈雄太郎が感じ取ったもの〉

雄太郎たちを金賞へ導くものは何かを考えると、45行目の「調和のとれた合唱」だとよみとれる。

5 雄太郎の思いが書かれている所を探す。

58行目の「歌声にのって」から65行目「ほんとうによかった。」までの部分に着目する。

・歌声を聞いて感動しているので歌詞にも注目する。「いつも君がそばにいて」、「今君と一緒に」に着目する。

以上より、解答の中心は61行目の「学校はなくなってもぼくたちの友情は変わらない」の部分である。

6 真由美が「小学生のような返事をした」のは、28行目「ふいに名前を呼ばれて跳び上がりそうになった」(驚いた)からである。よってイの解釈が合っていない。

P 93

- | | | | | | |
|--------|--------|--------|-------|-------|--------|
| 1 善・悪 | 2 一髪 | 3 承転 | 4 疑心 | 5 天外 | 6 怒哀 |
| 7 依然 | 8 前・後 | 9 厚顔 | 10 無援 | 11 霧中 | 12 道断 |
| 13 四・八 | 14 錯誤 | 15 自業 | 16 自答 | 17 縦横 | 18 捨・扱 |
| 19 尾・貫 | 20 離・裂 | 21 機・転 | 22 針小 | 23 未踏 | |
| 24 雨読 | 25 体・命 | 26 千・万 | 27 未聞 | 28 晩成 | |
| 29 同・異 | 30 单刀 | 31 三・四 | 32 黙考 | 33 適所 | |
| 34 天衣 | 35 東・西 | 36 船・馬 | | | |

P 94

7 R2年度

△解答▽

1 「I」九分三八秒

「II」九分

2 九分という中途半端な時間が、圭祐の体に刻みこまれていること。

3 ア

4 きつと、他の分野でも充分に生かせる

5 イ

6 希望や期待もなく無意味な時間を過ごすと思像していた高校生活に対して、興味を感じ始めた。

△解説▽

1 IもIIも時間が入ることは明らかである。

Iは、表の上に「中学二年 春」とあるので、本文の「二年生の春の大会で、九分三八秒」が見つけられる。

IIは、前後に「目標」「以内」とあるのを手がかりに「九分を切ることを目標に」や「九分以内とは：過去の目標タイム」という部分を見つけることができる。

2 傍線②の正也の発言に対して、圭祐自身が「何が？」と問い返している。それに対する正也の返答「九分っていう…ってことだろ」が答えとして該当する部分となる。

3 「心の琴線に触れる」とは、物事が人を感動させたり共感させたりすることを意味する表現である。この意味を知らなくても、正也が圭祐のことを繰り返し「すごい」と言っていることを押さえられれば、アが正解だとわかる。

4 空欄を含む「」の部分には、「正也の主張」と問いに書いてあるので、傍線部より前で、正也が圭祐について述べているところを見ると、「一つの分野として、研究を重ねて完成されたもの(＝圭祐が培ってきたもの)だろうから、きつと、他の分野でも充分に生かせる」とある。

5 傍線部直前に「そういうことされる方が嫌だろうなって思っ」て」とある。この部分が設問の「圭祐を不快にさせると判断して」に当たるので、「そういうこと」が指す内容を直前から読み取り、それと一致する答えを選ぶ。

6 心情変化を問われているので、正也とやりとりをする前と後でどのように圭祐の考えが変わったのか、指定語句をヒントにして該当部分を探す。

「高校生活」に対しては、希望や期待を中学時代に置いたまま、時間だけが無意味に過ぎていくような三年間を送ることしか想像できなかった。」の部分がやりとり前の心情、「興味を持てるかどうかは自信がないけれど、それを考えるのはあとでもいい。」の部分がやりとりを通して変化した心情なの

で、この部分をまとめる。

- P 97
- 1 運営
 - 2 衛星
 - 3 沿岸
 - 4 演奏
 - 5 恩恵
 - 6 温厚
 - 7 格言
 - 8 拡散
 - 9 拡張
 - 10 寒暖
 - 11 看板
 - 12 喜劇
 - 13 汽笛
 - 14 急激
 - 15 協議
 - 16 郷里
 - 17 勤務
 - 18 警護
 - 19 権益
 - 20 見聞
 - 21 減量
 - 22 孝行
 - 23 口座
 - 24 功績
 - 25 候補
 - 26 穀物
 - 27 根幹
 - 28 混雑
 - 29 財産
 - 30 飼育
 - 31 支給
 - 32 至急
 - 33 磁針
 - 34 辞退
 - 35 辞典
 - 36 車窓
 - 37 就職
 - 38 収容
 - 39 縮尺
 - 40 浸透

P 98 ⑧ R 3 年度

△解答▽

1 イ
2 幸との合奏

3 廉太郎のピアノの音色が変わったことに気づき、廉太郎の技術が上達したことを感じ取ったから。

4 「A」オ 「B」(幸に)音楽への情熱(が戻った様子)

△解説▽

1 「舌を巻く」は「あまりにもすぐれていることに対して」ひどく驚く・驚嘆する」という意味である。

2 「長いようで短い旅の末、最後の一言に至った時には」とあるので、「長いようで短い旅」とは二人で行った合奏のことだと分かる。また、「廉太郎は…合奏を申し出た」という説明から本文が始まっているので、本文のはじめから傍線②の直前までは、二人の合奏の様子やそのさなかに廉太郎が感じたことを述べた場面である。加えて、答えには、廉太郎が誰と合奏をしているのかを明記する。

3 問題には「演奏の途中でどんなことに気づき、どんなことを感じ取ったからか」とあるので、「(演奏の途中で)…に気づき、…を感じ取った」という形になるように解答をまとめるとよい。また、指定語として「音色」が与えられているので、これを手掛かりに解答をつくとよい。

傍線③の直前の「あなた、この演奏の途中で、腕を上げたんじゃない?」という発言から、幸は「廉太郎の演奏が上達したことを感じ取ったことが分かる。また、文章中に「廉太郎のピアノが音色を変えた。…」とある。幸はこのことに気づいたので、廉太郎の演奏が上達したことを感じ取ったのである。なお、「腕を上げる」は慣用句なので、答えにする際には言い換えたほうがよい。

4 A 延の性格を答える問題であることに注意する。問題の表中の、「持ち主」は延である。ここから「厳格な態度」という言葉が適していることが分かる。なお、E「冷淡な口調」は日ごろの幸についての説明であって、延についての説明ではない。

B 合奏が始まってから終わるまでの幸の様子をまとめると、次のようになる。

「幸のバイオリンは精彩を欠いていた」
「幸の目は依然として輝かない」
「廉太郎の放つ音に無意識に反応している」

新聞に書き立てられたことが原因で、音楽に気持ちが向いていない。



廉太郎のピアノの音色が変わる。

「幸の演奏にも力が戻ってきた」
「幸の目に…光が戻ってきた」
「(幸の)顔はわずかに上気している」

幸の演奏が熱を帯びる(音楽に気持ちが向いている)。

「上気する」は「暑かったり興奮したりして顔がほてる」という意味で、ここでは幸が演奏に熱を入れている様子を表現している。ここから、幸が音楽に対して(再び)前向きに取り組めるようになったことが分かる。また、傍線②の5行前に「これこそが本来の幸田幸だ。共に曲を形作る仲間すらも追い立て、焼き尽くす」とある。ここから、本来、幸は情熱をもって音楽に取り組む人物であるということが分かる。

5 本文中の「今も壁にぶつかって悩んでいる…右手が弱い」という問題はまるで解決していないから、以前から抱えていた課題をまだ克服していないと

いう思いが廉太郎にあることが分かる。そのうえで、傍線⑤「：僕も頑張らなくちゃなりません」と廉太郎は発言したのである。この発言から自分の課題を克服することを改めて決意している廉太郎の様子を読み取ることができ、このことを説明しているのはⅠである。なお、ウは「幸の才能を妬む気持ちによって自分が成長してきた」という部分を本文から読み取ることができない。自分が成長できたのは「幸が壁であり続けてくれた」からだと言っている。幸の才能を妬んだことが成長できた原因ではない。

- P 101
- | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 1 陳列 | 2 添削 | 3 踏襲 | 4 陶醉 | 5 吐露 | 6 徒勞 | 7 拝謁 | 8 拝借 |
| 9 剥離 | 10 破綻 | 11 破竹 | 12 煩雜 | 13 搬出 | 14 晚鐘 | 15 繁茂 | 16 汎用 |
| 17 批准 | 18 罷免 | 19 便乘 | 20 頻繁 | 21 封筒 | 22 布巾 | 23 沸騰 | 24 富裕 |
| 25 紛糾 | 26 便宜 | 27 返却 | 28 芳香 | 29 膨張 | 30 没頭 | 31 矛盾 | 32 摸索 |
| 33 勇敢 | 34 誘致 | 35 愉快 | 36 余韻 | 37 抑揚 | 38 隆盛 | 39 履歷 | 40 廉価 |

P 102 ⑨ R 4 年度

△解答▽

- 1 イ
2 ウ
3 「Ⅰ」農家の朝は「Ⅱ」あせる
4 茂三は、雪乃が寝坊したことに對して、怒ったりあきれたりしてはいないということ。
5 (自分は) 目標を半分は達成できたのだから自信を持っているのだと納得する(様子)

△解説▽

- 1 雪乃が「心臓が硬くなる思いがした」のは、直前で伝えられた茂三の発言に気づかされたことがあったからである。「はっとする」には「我に返る・驚く」などの意味がある。なお、ウ「ぞっとした」、オ「ぎょっとした」は言い過ぎである。

- 2 直前のヨシ江の発言に注目する。「そんなにまっくらけえして行かんでも

大丈夫(そんなに慌てて行かなくても大丈夫)」と言っている。このことを説明している選択肢はウである。

- 3 Ⅰには雪乃が感じ取ったこと、Ⅱにはこのときの雪乃の気持ちが入る。問題中のまともにもあるように、雪乃は納屋に明かりがついているのを見たり、トラクターの音を聞いたりしたのである。これらから「農家の朝(農作業)はとっくに始まっている」ことを感じ取ったのである。また、「寝坊したために作業に遅れてしまった」という自覚のある雪乃は、それを感じ取ったとき「あせった」はずである。

- 4 それまでの内容を整理したうえで問題を考えるようにする。

○雪乃：寝坊して農作業に遅れてしまったことに對して、茂三が「怒っているのではないか、あきれいているのではないか」という不安。

← 茂三が雪乃に笑顔で「寝ぼすけめ」と声をかける。

○雪乃：胸のつかえがとれ、楽になっていく。

要は、自分が寝坊したことに對して、茂三は怒ったり、あきれたりしてはいないことが分かり、雪乃ははっとしたのである。

- 5 雪乃が直前の茂三の言葉に「頷いて」いることから考える。雪乃は茂三の言葉を「目標の半分は達成できた」という意味だと捉えており、この言葉に納得できたから彼女は「頷いた」のである。

△解答▽

- 1 ア
- 2 すつと冷めていた
- 3 すごくよかったです
- 4 目立たない楽器であっても、大切な役割をになっていることに誇りを持っている。
- 5 オ
- 6 (ソフトボールのエースでなくても)自分が自分の人生の主役なのであり、トレーナーとしてのエースを自指せばよいということ。

△解説▽

- 1 「似ても似つかない」は「全く似ていない(まったく違う)」という意味である。イ「あまり似ていない」は、「まったく(全然)くはない」という意味をふくんでいないので誤りである。なお、オ「似つかわしい」は「(その人に)ちよほどよい」「ふさわしい」という意味である。
- 2 答えるのは「久保塚さんの演奏を聴くまでの早希の心の状態」なので、注意する。14行目に「ずつと冷めていた私の心も、身体も、熱くなった」とある。「ずつと冷めていた」が演奏を聴くまでの早希の心の状態、「熱くなった」が演奏を聴いたときの早希の心の状態である。
- 3 ③の直後にある「三度目の台詞だったけれど」や、直後の「『はは、ありがとう……』』という久保塚の発言に注目する。19～20行目に「『すごくよかったです』／席に着くなり、さつきと同じ台詞を私は繰り返し返した。」とある。早希の「『すごくよかったです』』という言葉に対して、「『はは、ありがとう』』と久保塚は返したのである。
- 4 傍線部④中の「屋台骨」や、問題のまとめ中にある「主役になれないことに不満を感じている」に注目して、久保塚の思いを推察する。「屋台骨」とは元来「家屋を構成する柱」などを指す言葉であるが、そこから転じて「組織を支える中心となるもの／組織を支える重要なもの」といった意味でも用いられる。このことから、久保塚は「なかなか主役にはなれないものの、

トロンボーンはオーケストラを支えるための重要な役割を果たしている」という自負を持っているのではないかと推察することができる。このことをふまえた上で、早希の「不満に感じている」という思いと対になるような久保塚の思いを推察するとよい。

5 傍線部⑥中の「きよとんと(する)」とは「その場のことがのみこめぬいため、目をまるくしてぼんやりとすること」である。また同じ傍線部中の「小さくうなずいた」は直前の早希の発言に対する反応である。これらのことから正解がオだとわかる。ア～エの選択肢中には「きよとんと」の説明になっている表現がない。

6 傍線部⑦中の「こんな」が、直前の「いつまでもエースにこだわら私は、混同していたのか。……トレーナーとしてのエースをねらえばいいのではないか。」の部分の指していることに注目する。また、「こんな簡単なこと」に気づくきっかけとなった久保塚の発言にも注目する。この直前、久保塚は「混同してるよ」／「トロンボーンと僕の人生を」／「トロンボーンという楽器がオーケストラの主役にはなりにくいからといって、僕が僕の人生の主役でないわけではない」と発言している。この発言を受けて、早希は「エースピッチャーとしてチームの主役であったこと」と「自分の人生」を混同していることに気づき、そのうえで「ソフトボールのエースでなくても、自分が自分の人生の主役なのだから、(そうだったこと)に対するこだわりを捨てて」今度はトレーナーとしてのエースをねらおう」という思いに至ったのである。